

ネパール大地震

山間被災者の把握困難

長崎大・山本教授 支援強化訴え



山本太郎長崎大教授

ネパール大地震の被災地で負傷者らの治療に当たった長崎大熱帯医学研究所の山本太郎教授(国際保健学)は8日、東京都内で取材に

応じ、交通事情の悪い山間で広範囲に被災者を取り残されている可能性を指摘、支援強化の必要性を訴えた。

山本教授は1日、国際医療援助団体「AMDA」(岡山市)チームの一員として、首都カトマンズから車で3時間ほどの谷あいの町力リチョウルに入った。建物が損傷した病院の敷地に仮設

の診療所をつくり、骨折や打撲の治療を続けた。出産する人もいた。

患者が医療施設に集中する都市部での災害と違い、谷間に位置する診療所には、周囲の山から数時間かけて担架で運ばれたり、自力でつえをついて歩いてきたりした被災者が1日70人ほど、断続的に訪れた。

診療所まで徒歩で数日かかる遠方の山間部でも地滑りなどにより多くの人が被災したと考えられるが、「どこに集落があり、何人がけがをしているか全容を把握することは困難だった」と振り返る。

4月25日の発生から2週間。負傷者の救命などに重点が置かれる急性期は過ぎつつあり、今後は水の汚染に関連したコレラや結核に注意が必要だ。「弱いインフラや医師、看護師の大都市への偏在など、もともとあった問題を災害は顕在化させる。優先すべき課題を特定した上で支援を継続していくべきだ」と話す。